
東方魔狩伝

漆黒剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方魔狩伝

【Zコード】

Z34790

【作者名】

漆黒剣士

【あらすじ】

紫によって幻想入りしたダンテとネロの物語です。

ダンテとスキマ妖怪

「デビルマイクライ」と裸に赤いコートを着ている中年の男が電話に向かつて言った。

「悪いな…もう閉店だ」と言い一方的に切り、「パスワード無しか…暇だな」と自分で改造した銃エボニー & amp; アイボリーをくるくる回し暇潰しをした。彼の名はダンテ、一千年前悪魔にして悪魔を裏切り魔帝を封印し英雄となつた、魔剣士スパーダの息子で人間と悪魔のハーフである。「ダンテ～いるか?」と誰かが言って入ってきた。「何だ、モリソン」と暇潰しを止めたダンテが言った。「ダンテ、仕事を持つてきたぞ」とダンテによく仕事を持つてくるモリソンが言った。「分かった、引き受けよう。で俺は何割もらつていいんだ。」

「いや、今回は全部お前のものだ」

「おいおい…なんだ今日はボランティアで仕事をするのか?」

「いや、報酬は出るぞ」

「なんか怪しいな…で内容は?」

「彼女から聞いてくれ」

「彼女?」

「ここにちは」と謎の声が聞こえ、ダンテの目の前で急にスキマみたいなのが出来てその中から女がしてきた。

ダンテ 幻想郷へ

「はじめましてダンテ、私の名はハ雲紫よ」

ダンテ「モリソン…」

モリソン「なんだ、ダンテ？」

ダンテ「悪魔以外の依頼か？」

紫「いいえ、違うわ。れつきとした悪魔がらみの依頼よ」

ダンテ「どうやら、暇潰しにはなりそうだな。」

紫「そうね潰せるとと思うわ」ダンテ「それはすばらしい、で場所は日本か？」

紫「いいえ、幻想郷という場所よ」

ダンテ「幻想郷？モリソン知ってるか？」

モリソン「さつき知った。」紫「結界によつて守られている場所と思えばいいわ。」

ダンテ「よし……じゃあ行くか」

「私が送るわ」紫が言うと紫が現れたのと同じスキマが現れた。

モリソン「ダンテ、土産話を楽しみにしているぞ」

「土産になるようならな。」と言つとダンテは自分の相棒であるエボニー&アイボリーとリベリオンを持ち紫のあとを追つてスキマに入った。

ダンテ 幻想郷へ（後書き）

はじめまして、漆黒剣士です。突然ですが、皆様にお聞きしたいことがあります

実は、ダンテ編とネロ編と分けるつもりですが、（途中から合流する可能性あり）そのダンテ編とネロ編をどの東方キャラクターと合わせるか皆様の意見で決めたいと思います。

例：ダンテは、霊夢

ネロは、咲夜

こんな感じで感想のところに書いていただければ幸いです。

皆様のご意見を楽しみにしています！

ちなみに次回はネロ編をスタートしたいと思います。

ネロと魔具（前書き）

ネロ編開始です。

ネロと魔具

悪魔「くつ…まさか人間にここまでやられるとは」

ネロ「HEY!!まだ始まつたばかりだぜ、もう降参か?」悪魔「おのれ…ふざけおつて!!」全身全靈を込めて突撃してくる悪魔それを慌てることなく彼の愛銃^{ハブルーローズ}で突撃してくる悪魔を撃ち抜き消滅した悪魔に

ネロ「To o e a s y(簡単だな)…」と呟やき、さつき消滅した悪魔の近くにある魔具を拾つた。

彼の名はネロ、かつては教団騎士として働いていたが、ある事件から自分が所属していた教団を潰し、悪魔^{デビルハンター}狩人となつた。ダンテとはその事件で知り合つた。彼の右腕は悪魔の手で日常では包帯を巻いて隠してある。その悪魔の手にダンテの兄^{レッドクライフルローズズ}バージルの剣(闇魔刀)が入つているが基本的に使わず彼の愛劍と愛銃を使つている。

(変な魔具だな…)と思いながら手に取つた魔具を見るネロ。

彼が今まで回収した魔具は、どれも刀やハンマーなどの鈍器や刃物が多かったのだ。

ところがこの魔具は、腕時計みたいな手に付ける魔具だった。

その時、急に魔具がネロの左腕に巻き付いてきた。ネロはビックリして取つて取つとしたのだが、魔具が光り出してネロはその場にいなくなつた。

ネロと魔具（後書き）

感想をお待ちしております

ダンテと鬼（前書き）

アンケートの結果
(結果といつても一人だけだったけど…)

ネロが紅魔館

ダンテが永遠亭となりました。

ご協力ありがとうございました。

ダンテと鬼

（スキマの中）

「ダンテ言つておきたい事があるんだけど」

「なんだ、紫？」

紫は説明した。今から行く幻想郷には、いろんな種族があること。争うときには“スペルカードルール”に則つて争わなければならぬ。

「だからダンテ、殺すのは悪魔だけにしてね。」

「分かつてる。悪魔以外殺る気はないのでね」

「それを聞いて安心したわ。はい、これ」そう言つて渡してきたのは白い紙だった。

「これが“スペルカード”ってやつか。」

「そうよ、それに自分が使える技の名前を書いて相手に宣言するの。今之内に作ったほうがいいんじゃない？」

「そうだな」ダンテは4、5の紙にすらすらと書き、それを懐に入れた。

「まだ着かないのか？」

「もうす……」

「HEY!! どうかした」「ダンテ今すぐスキマから出て、」 wha
t! ? 何があった。」

「結界が破られたの。」

「それは大変だな。」

「それと、侵入してきたやつがいる。」

「分かった。出でいくよ、でどうやつて出ればいい?」

「待つて今、出口を作っているから……できた。」「出たらどうすればいい?」「とりあえず、自由に動いていいわ。いつでも会えるから」

「分かった。ありがとな」

ダンテはスキマから出た。スキマから出るとそこには、竹が多くあり、日本を思わせた。

「ここが幻想郷か……」

「助けてーーー！」突然、後ろから悲鳴が

「ん！？」ダンテが振り向くと、そこには、兎の耳がある女の子に襲い掛かっている悪魔>スケアクロウくわうがいた。

ダンテと魔（後書き）

→ダンテのスペルカードと能力へ

? 姿符「トリックスター」

? 姿符「ソードマスター」

? 姿符「ガンシリンガー」

? 姿符「ロイヤルガード」

? 魔符「魔魔の引き金」
デビルトリガー

能力…？悪魔の力を使える程度の能力
？一度にあらゆる魔具を使いこなせる程度の能力

* ? は『デビルトリガー』時のみ発動。

今後増えてくるかも？

次回はネロ編です。

メロヒ素（前書き）

メロヒ素です。

ネロと紫

「やつと、おやまつたか…」
「はいはいだ？」

ネロが光から解放されたとき、周りを見渡すとそこまでいた場所とは百八十度違っていた。

霧が出ていて近くに湖が見えていた。

「どうなっているんだ…」

「それは私が聞きたいわ」

「…」

ネロは田の前に出来たスキマに反射的にブルーローズを構えた。

「安心して、危害を加える気はないわ。」

スキマから紫が出てきた

「ただあなたがどうやって“幻想郷”にきたのか教えてくれればの話だけど…」

「幻想郷？初めて聞くな… 分かった、信じる信じないはあんた次第だが、話すよ」

ネロは、今までの事を話した。紫もネロの話を信じて幻想郷について詳しく話した。

「その“スペルカードルール”に則つて闘えばいいんだな。」

「ナハリよ、あと…はー」

ネロに紙を渡した。

「それにあなたの技を書けばスペルカードになるわ」「分かつた、あと結界を破つて悪かつた。」

「別にいいわよ、不可抗力だつたみたいだし…それに悪魔を狩つてくれるんでしょう?」

「ああ、あんたが元の世界に帰してくれるならな」

「ええ、約束するわじゃあネロ頼んだわ」

「待て」

ネロはスキマに入ろうとしていた紫を止めた。

「何?」

「どこか住める場所がないか?」

「そうねえ…これから少し行つた所に紅魔館っていう館があるわ、そこに行つてみたらどうかしら?」

「分かつた。ありがとう紫

そう言つとネロは歩き始めた。

「頑張つてね」

紫はスキマの中に入った。

ネロと紫（後書き）

次回もネロ編です

ネロと~< ;前編> ;(前書き)

ネロ編です

ネロと…&1t・前編>；

少し歩いてネロは思った。

（今の内にスペルカードを作つておくか。）

ネロは紫からもじりつた紙に自分の技を書いた。

書き終わると辺りから寒気がしていた。

「おいおい、なんで寒くなつていいんだ？教えてくれよ、お嬢ちゃん」

「あたいに気付くとはやるみたいね」

「でもあんたは絶対に勝てないよ、だつてあたいは“ わこきょー”だもん」

「じゃあ、“ わこきょー”のお嬢ちゃん、どうして寒くなつているの？」

「それはあたいの能力へ冷氣操る程度の能力へのせこだよ」

「じゃあ、お嬢ちゃんを「テンパン」しきりすれば収まんっ！」

「人間にできるならね。」

「名前は？」

「チルノ…あんたは？」

「ネロだ」

ネロは魔力を抑え込んで氣絶程度にしてあるブルーローズを取りだし
チルノは弾幕をだした。

「showtime!!」

ネロは弦くどブルーローズを空へ向かつて撃つた。

ネロと~< 前編 > ; (後書き)

次はダンテ編です。
感想をお待ちしています。

ダントと氷遠亭（前書き）

ダントと纏です。

ダンテと永遠亭

(殺られる…)

そう思つたのは頭に兎の耳がある女の子…>鈴仙・優曇華院・イナバくだった。

彼女は師匠であるゝ八意 永琳くからお使いを頼まれていたのだ。

その帰り道、会つてしまつたのだ悪魔に

数は十匹程度だった。

弾幕で2・3匹倒したがかなりの時間を費やした。

このままだと死ぬと思つたイナバは自分の能力ゝ狂気を操る程度の能力ゝを使つたが悪魔には効かなかつた
徐々に距離を縮める悪魔になす術は一つしかなかつたそれは…

「助けてー」

助けを求める事だけだつた。

それが彼女を救つた。

静かな竹林に火薬が破裂した音が響き、近くにいた悪魔が倒れ、その悪魔の体には銃痕があつた。

イナバが後ろを見ると、そこには…

銃口から白い煙を出しているエボニーを片手で構えているダンテがいた。

「まつたく…わざわざこんな所まで来て、暇なのか悪魔も」

悪魔達はイナバよりダンテに狙いをつけていた。

悪魔が一斉に襲いかかる

しかしダンテは分かつていたかの様に上に高く跳んだ。

悪魔達がダンテのいた場所に集まつた。

エボニー & アイボリーを構えて頭を下にしたダンテ

そのまま体を回転させながら撃ち、悪魔達に鉛を喰らわせた。

ダンテが着地するとそこには、悪魔達の死骸がダンテの周りにあつた。

イナバはそれをじっと見ていた。

イナバは憧れた。ダンテの無駄がなく、スタイリッシュに決めて戦い方に

「HEY!!お嬢ちゃん、大丈夫か?」

「あ、はい大丈夫です。」

「俺の名はダンテだ、お嬢ちゃんは?」

「私は鈴仙・優曇華院・イナバと聞こえます。好きな言い方でいいで

すよ」

「OK！イナバ、とりあえず 住める所はないか？今さつき幻想郷に入つたばかりだからな」

「でしたら、私が住んでる > 永遠亭 < でしたら紹介しますけど」

「そこ」にしよう

「じゃあ、ついてきてください。」

その時、悪魔の死骸からまだ生きていた悪魔が残った力でダンテの腹部を持っていた鎌で刺した。

ダンテを刺した悪魔はそのまま力尽きた。

イナバは呆然とした。

ダンテの腹部は鎌が深々と突き刺していた。即死も可笑しくない傷だつた。

しかしダンテはたんたんとその鎌を抜いた。

「ダンテさん！！だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。慣れている。」

そう言うとダンテは腹部を見せた。イナバは驚いた。ついさっき、刺されたばかりなのに、傷がふさがっていたのだ

「一応、治療をしましょう 細菌が入っているかもしぬませんし。私が永遠亭でみます」

「意味がないが…まあ良いか」

ダンテとイナバは永遠亭へと向かつた。

ダンテと永遠亭（後書き）

次はネロ編です。
感想をお待ちしています。

ネロと~< ; 後編> ; (前書き)

更新が遅れていますみません。

ネロと？<後編>；

ダンテが永遠亭に向かっている中

別の場所では1人の人間と妖精が闘っていた。

チルノが出す弾幕をネロが簡単にブルーローズで打ち消す、それを繰り返していた

「チルノ！！そんなチンケな攻撃しかできないのか？
よく、それで“さいきょー”って言えたな」

ネロがチルノを挑発

「うるさい！！ネロが人間だから手加減してだけどもう知らない！」

そう言うとチルノはスペルカードを取り出した。
「凍符>パーフェクトフリーズ<」

チルノは宣言すると弾幕を出して凍らせた。

そして、時間が経つにつれて凍っていた弾幕が徐々に不規則に動き始めた。ネロは迫り来る弾幕を打ち消したり、避けたりして回避した。

「終わりかチルノ？そろそろ遊びは終了だ。」

ネロは、ブルーローズに魔力を込めて撃つた。

弾は、チルノに当たらず、地面にあたった。

「ハズレ、残念でした」

チルノがからかう。

またチルノがスペルカードを取り出そうとしたとき

チルノの田の前で爆発がおきた。

ネロはわざと外した。爆風で氣絶するよつに

た。
ネロの思つた通りにそこには、田を回して氣絶しているチルノがいた。

ネロと~<後編>（後書き）

次回は、ダンテ編です。

感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3479o/>

東方魔狩伝

2010年11月14日03時02分発行